

## 停年前の一ヵ年, 1957 年度を省みて

谷 安 正

四代所長・東京大学名誉教授



谷 名 誉 教 授

昭和 32 年度を間近かにひかえた 2 月の第 3 水曜日でしたか、教授総会で次期所長として私が選挙されました。これには少からず当惑しました。しかし、この総会での結果は辞退しないということが不文律といってよい程の前例になっておりましたので、お引受け致しました。四月に入り矢内原総長に新任の挨拶に伺った際、どうも不適任ですがよろしく御引立ての程をと申上げたところ「ご苦労ですね、しかし生研という組織の力をバックにして君の信ずるところに従って進むのですね」との励しのお言葉を頂戴しました。自分では心の中に思っている他人、特に矢内原さんのような高い人格の方からそういわれると何かしら強く力づけられた感がありました。第一に想起するのは生研の定員問題ですが、生研の努力が実ったとでも申しませうか、研究業績の上につれ、事務当局が生研に同情的になったこともありましたか、私の時になってから、11 月中旬遂にわれわれの主張に近い定員数で話がまとまり一寸ほっとしました。この間、私は総長と顔を合せる毎にこの定員問題の解決につきお願いしました。その交渉に当りましては年度当初に総長から賜った激励のお言葉を思い出し、これに力づけられた点が多かったことに感謝致しております。

定員と関連した話ですが、丹羽理事長、星合常任理事のご努力により生研の外郭団体である生産技術研究奨励会の財政的基礎が一層固まり、そのお陰で生研への派遣研究補助員を 5 名追加することができたこと、その他に生研所員の指導の下に生研の指定する研究課題について研究希望の大学院学生若干名に対し前記の奨励会から奨学金を支給する制度もつくり得ました。この点でも定員の不足の幾分かを補い得るようになりました。また、外郭団体がこのような援助ができる程になったことは、生研の存在が世に認められて来た一つの証しといっています。

次に移転問題ですが、生研が東大の本部から遠隔の地にあることが何かにつけ障害となっており、特に若い優秀な研究者が当所への勤務に二の足踏む嫌いもあり、潑刺とした新しい血液の欠乏による研究所の老化が心配されておりました。たまたま昭和 32 年 11 月中旬でしたか、青山竜土町にある米軍使用のハーディバラックス(敷地 120,000m<sup>2</sup> 建物面積約 38,000m<sup>2</sup>) が返還されることになったので、そちらの方へ移転したらどうかとの話がありました。全くお誂え向きでありましたので、教授総会に諮ったところ全員一致の賛成でありました。それで総長のお許しを得て全部を東大へいただけるなら結構ですと文部省に返事しました。文部省では東京大学の方でも手をつくしてくれとのことで早速方々への運動を初めました。特に明けて 33 年になってから茅新総長にも熱心に奔走していただいて、話がほとんどきまりかけたかのような感じでしたが、話はそれ程簡単ではなく、肝心なところでストップし、私の在任中には到頭未解決に終わりました。その後一年有余を経て茅総長および福田現所長の御努力が実って移転が決定したということ、誠に喜びに堪えぬところです。移転により今まで悩んで来た数々の障害が除去され、今後の発展に大いに期すべきものあることを信じます。

次に I.G.Y. に関連する観測ロケットのことに移ります。前所長時代からロケットの開発が初められ、とも角にも、昭和 33 年中に観測ロケットをつくって所要の高さまでは打揚げる必要がありました。それには 32 年度中に発射実験を終え、観測ロケットの製作計画を完了しなければなりません。それで日本学術会議のロケット観測委員会から申入れられたロクーンロケットの製作および発射実験の依頼もお断りしたりして、地上ロケット一本槍で進んで参りました。多少頑固であったかもしれませんが、二兎を追う愚のおそれと、発射試験にはその道の専門家でもない研究者までも含めて大勢の人がお手伝いとして 2, 3 日余分に秋田に留まらなければならぬことを考えると実際お引受けする勇氣はありませんでした。幸い、33 年中に観測ロケットにより何かのデータが得られたことはまことに嬉しいことであり、またそこまで漕ぎつけられた研究者各位のご努力に敬意を表するものであります。

このようなことのあった 32 年度の末、3 月 25 日の私の還暦の誕生日の祝いと、退職の送別とを合せ重ねた心のこもった数々の送別会に送られて、3 月 31 日入学以来約 40 年を経て東京大学を無事に去ることができました。